

あそ

1

2018



双六の賽の禍福のまろ

ぶかな

万太郎



蓮染め本塩沢お召

あそ

一月



秋の雨

空蟬に入りさうなる跼みやう
秋蝶につまづきさうに立方根
鴉の聲しか南京櫨紅葉
かしぐときそろって傾ぐ秋の雨
てのひらを棒で打ちつつ夜番ゆく

東京

佐藤 喜孝

佐渡

佐渡語る遠まなざしや焚火燃ゆ
焚火して生まれ育ちは佐渡と言ふ
浜焚火遥かな佐渡へ火の傾ぐ
色褪せしものは捨てなむ櫨紅葉
淡紅の佗助の花ミルク沸く

東京

田中 藤穂



三重

長崎 桂子

賀状

賀状書く此度も減りて天仰ぐ
柿を噛む病去れよと念じつつ
伊勢海老の給食歓声の渦
冬満月暫し癒しの時を得る
枝倒れたれど実千両紅を増す

東京

森 なほ子

自然教育園

サンタめく落葉袋の五つ六つ
街川に陸と流れや冬青空
隠沼の水増えてをり枯の中
男らの二人一組落葉掃く
男らの落葉に隠す鼠捕り

埼玉

山荘 慶子

小春

半袖の子等駆けまはる小春かな
木枯の野山つつみて青き空
蝶のごと舞ひ散る落葉十字の碑
柿ひとつ残りて空の広ごれり
色かへで門に張り出す松の枝

東京

赤座 典子

膝手術

積年の痛み和ぎ冬うらら
初時雨りハビリ室の杖の音
部屋移りドームを望む冬日和
ヒール高きブーツの人は夜勤明け
帰る日の富士雪化粧終へてをり



埼玉

秋川 泉

十三夜

自転車を追ひかけてゐる十三夜
里芋をコロツケに変へ客を待つ
小春日の起き上りたる野菊かな
うたた寝の窓から見ゆる十三夜
雨風が払ひ清めし十三夜
前号正誤目をこらし失せもの探す荻の声

東京

石森 理和

柿

白鷺の十羽ほど寄る冬の淵
腰丈の今年植した柿もみぢ
手帖から柿のもみぢ葉落ちかかる
柿たわわ甘か渋かは鳥には見ゆ
紅葉濃しぐるり奥山の露天風呂

埼玉

大日向幸江

年の瀬

大雪や手の平にあり持病薬
スノボーの冬を追ひ越す速さかな
小説の終りに近き枯葉道
年の瀬や耳遠くなり嬉しくも
空っぽの部屋に咲いたるシクラメン

千葉

黒澤 佳子

マスク男

ばあちゃんの家が好きよと秋の暮
銀杏散るベンチの二人スマホ打つ
菊見頃向こう三軒我が庭も
柚の棘軍手突き抜け気を付けても
マスク男マスク買ひ来る今朝も来る



東京 七郎衛門吉保

妻入院

妻入院レシピ本買ふ夜寒かな
起居ひとり呼び鈴鳴らしおでん鍋
リハビリも順調な妻冬あかね
退院をかみしめ歩く落葉道
山茶花も一と月咲いて妻帰る

東京 篠田 純子

早稲田

漱石山房ざくと割れたる柘榴の実
素行の墓に乃木大将の梅もみぢ
漱石ビール安兵衛煽りし酒屋にて
往来にはみ出す花屋シクラメン
牡蠣鍋を始めましたと墨の美し

石川 定樞じょう

表紙の朱

秋深し空家のはずの灯れば
実存といふこと榎檣卓に置き
蓮堀りのふりさけみれば飛行雲
集落や懸大根が竿に伍し
時雨ると年金手帳表紙の朱

埼玉 須賀 敏子

秋深む

紺碧の空よりどつと銀杏散る
受取り正子さんに苦勞する程今年米
干柿を厚く剥きたる男の手
フリマにて求めし綿入れ陽の匂
予約して新蕎麦の客賑やかに



横たはる體の下を秋の風 佐藤喜孝

起重機を真ん中に置き秋の虹 須賀敏子

月の句座医師と僧侶の布袋腹 田中藤穂

立冬の風に川音調和する 長崎桂子

使はれぬ外階段に秋の蝶 森なほ子

静けさに緑の蒴果棉を吹く 山莊慶子

台風裡校庭よぎる石たたき 赤座典子



紫蘇の実の始末遅れて母の声 秋川 泉

初冠雪見えない空気を食べ尽くす 石森理和

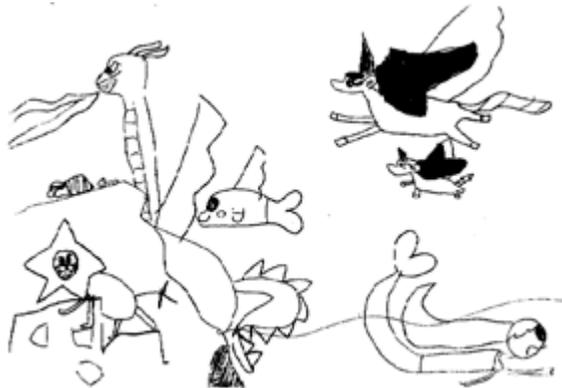
小春日やまどろむ猫の爪を切る 大日向幸江

グラタンに覗く天火や秋の暮 黒澤佳子

肉じゃがの湯気に揺られし顔と声 七郎衛門吉保

小名木川の岸は直角秋の暮 篠田純子

道あれば電線が沿ひ秋燕 定梶じょう



妻の歳一つぶやせり秋日和

佐藤 喜孝

胸がいつぱいになりました。どの季節もどの季節も奥様の恭子さんを想はない日はない。秋の晴れ渡った日、やはり恭子さんと会話なさっている作者です。(泉)

立冬の風に川音調和する

長崎 桂子

冬の季節風が本格的に吹き出す頃、日差しも弱まり、日の暮れるのも早くなる。冬を迎える川音も、それに合わせるように聞こえてくる。季節は、こんな風に移ってゆくと、作者は豊かな感性でとらえているのですね。(泉)

抵抗の一票投じ秋刀魚買ふ

田中 藤穂

昨夏の衆院選、本当にしらける選挙でした。かといって権利と義務を放棄するわけにもいきません。はかないけれどせめてもと一票を投じ、帰りに勢いでバカ高い秋刀魚まで買ってしまいました。お気持ちわかります……私は値段に抵抗してこの秋秋刀魚を買わずじまいでした。

使われぬ外階段に秋の蝶

森 なほ子

古いアパートの外階段。飛び方も弱々しい秋の蝶がその階段に。「どちらも滅んでゆくものと云う」時を刻む今を見事に表した句と思えました。(泉)

(なほ子)

秋深む思ひ通へる友のあて

山莊 慶子

長い長い交流のあるご友人でしょうか、それとも長い間、それぞれの人生に忙しくあつて、久方ぶりに交流のあつたご友人でしょうか。時間、空間を飛び越して友情は深まっている。「秋深む」と云う言葉が、見事にその全てを物語っているように思われます。(泉)

また生の実を醤油で煮詰めて佃煮に。熱々のご飯に最高です。丈夫なのでほっておいても育つけれど、摘み時はなかなか難しく、遅すぎると固くなってしまう食べられません。忙しい作者はついつい忘れてしまったのでしょうか？もう紫蘇の実が摘んだの？という母の声が聞こえたような気がする作者です。(なほ子)

さやけしやカルボナーラの赤胡椒

赤座 典子

スパゲッティ・アツラ・カルボナーラは生クリームを使うので見た目が白っぽい。そこに赤い粒コシヨウの色が散らばっているの目でさやけく、またプチと噛むとこれまた独特の香気が鼻腔に舌に爽やか。食欲の秋満喫の作者でした。(なほ子)

のどかさや稲刈済し塩田平 石森理和

塩田平は長野県千曲川沿いの一帯。この間までおもそうに実った稲はすっかり刈り取られて、田はすつきりとし穏やかな晩秋の風景となっています。今年も無事に収穫を終えた安堵感をのどかさと感じています。(なほ子)

紫蘇の実の始末遅れて母の声

秋川 泉

紫蘇の実を秋に摘み取り塩漬けにして保存

小春日やまどろむ猫の爪を切る 大日向幸江

暖かい日差しの中に気持ちよさそうに眠る

猫。だらりとした足を持ち上げ爪を切る作者。信頼しきつて身動きもしない猫。平和なひとときです。(なほ子)

秋霖や和室の敷居キシミおり 黒澤佳子

秋の寂しく降り続く雨。ひっそりとした和室に入った作者は、その静けさに敷居が軋んで鳴る音に気付きました。秋の物悲しさがいつそう深く感じられます。(泉)

肉じゃがの湯気に揺られし顔と声 七郎衛門吉保

湯気を詠むとき肉じゃがは珍しいのではないでしょうか？あまり俳句っぽくないところになりアルさがあります。「肉じゃが」の効果は大。家庭の暖かさを表す代表選手です。この句の場合、湯気のむこうにある顔と声は、勿論退院さ

れた奥様の久しぶりの笑顔ですね。(なほ子)

豚汁お替り女子寮秋の暮れにけり 篠田純子

食欲旺盛な女子寮生達、豚汁は勿論お替りあり。そんな彼女らをほほえましく見ている作者。上五の字余りも、豚汁、女子寮、秋の暮れ、お替り、これだけの単語が詰まっても窮屈な感じがしないのは秋の暮れにけりと引き延ばしたことで、ゆったりとした感じがうまれたのでしょうか？(なほ子)

沼のある山の向かうへ銀河の尾 定梶じょう

都会にあって、今では決して観ることの出来ない、何と美しい光景でしょう。現代でも、天の川が山の向かうへ続く星空を、眺める事が出来る日々は、何にも代へ難く、尊く、憧憬の思ひが致します。(泉)

山下りて稔り田の中出湯かな 須賀敏子

田一面、秋の稔りの季節に下山なさった作者。そこに温泉が湧いていたのですね。山の疲れもいっぺんに吹き飛んで、湯で癒されて、ゆつくりなさったことでしょう。(泉)



比来披見

昨年の『あを』の扉を坪内稔典先生のカバの俳句を作者自筆でといふ贅沢をさせていただきました。

寝そべって一山となる冬の河馬
たつぷりもどつぷりも河馬夏の河馬
桜散るあなたも河馬になりなさい
目が浮いて晩秋のカバ水の力バ
夕立の中心になるカバのデカ
カバの目の漆黒が澄む水が澄む
哲学の日和ぐちゃつと赤いカバ
神様の落胆みたい赤いカバ
へなちよこもカバも午前の虹の中
水脱いで春の真昼のカバ二トン

印箋に書かれた書は一家風を得てみて書として楽しめた。その上俳句は手垢の付かぬ新境地へ歩を進めるべく耀きを放つてみた。お楽しみいただけたらうか。

作品には河馬とカバ、二種類の河馬が登場する。河馬の本来は獰猛な生き物ときく。日本の

河鹿の巻

故郷の闇うめつくし河鹿鳴く 裕子
すずしき灯もれくる家居 竹洗
水草のゆらりゆらりとさざめきて 音音
ベンチ横目に足早に過ぐ 裕子
二日月ひとに知られず町の西 竹洗
みしらず柿を買物籠に 音音
村人が総出の応援運動会 裕子
ガス風船のまだ見えてゐる 竹洗

未完の歌仙。何故か止まってしまった。未完といふ完成品でもよいかなどもおもひここに。発句は齊藤裕子さんの句をいただいた脇起しである。

闇らしい闇を体験した記憶は千葉の布佐での蜜狩のとき。田んぼに下りていくらしいのだが全く闇といふ泥の中に足を踏み入れてゐる感じでした。その闇を埋めつくす河鹿の声、産土賛美である。「故郷や」と大見得を切りたくなるが、「や」が二音続くので控えた。

脇は佐藤喜孝。近刊、裕子著『河鹿の里』の力



佐藤 喜孝

動物園で見る河馬はいつも水の中にじつとして動きも少ない。夜行性だから昼間の動物園では仕方がないか。ムーミンとしてカバは親しまれる動物に描かれてゐる。稔典河馬はいかがでしかたか？好きなカバ、可愛いカバ、なんだか分からないカバといろいろあります。何回も読み返してゐると不思議なことに稔典カバに親しみが湧いてきます。「あなたも河馬になりなさい」とすすめられたので「見てきたる動物園のカバと水」と作り、並べてみたが面白味に欠けて力が弱い句でした。やはり河馬にのめり込んだ人の句は違ふものだ。

『ヒマ道楽』（坪内稔典著・岩波書店）といふ随筆集に「カバを見に」といふ一文がある。「モーロクのススメ」といふ講演会のとき。定年後生きてる意味が不明になったといふ質問者に、著者は「ぐずぐず仲間になりましよ、老人たちが、たとえば芝生にすわって、おにぎりを食べながらですよ、自分の存在価値は何かを議論する。そんなことしておもしろそうじゃないですか。ついでに、カバを見にいきませんか、いっしょに」と書いてあった。

バー写真は鹿児島の実家と聞いた。カメラは裕子さんのご子息。この写真を知ってゐたらもう少し増しな句が……。

第三は佐藤恭子。水草が「さざめいて」ゐるのがいい。山紫水明である。

第四。川沿ひの遊歩道を思った。ベンチに坐つてゐる人ではなく、通り過ぎる人として詠んでゐる。氣遣つて二人の前を足早に過ぎていく人を描いてゐる。月の座は有り明けの月です。みしらずは音音さんの大好物。買物籠とはお年が知れる。わたしもおぼろげながら木の持ち手で手作りの買物籠を母が作つてゐたのを思ひ出す。運動会は地域のお祭りの一つにもなつてゐるくらい。屋には校庭の敷物のうえで重箱に詰めたお弁当が開かれる。まさに村や町の晴れの日である。勉強が苦手な子もこの日は活き活きとしてゐる。無風であれば校庭の空に小さくなくても解きはなれたたガス風船の昇つていく色が見える。思い出の表六句＋αになつてしまつた。

さて、このあと続けるか迷つてゐる。どなたか続けてみませんか。（喜孝）

ヴェニスの水すまし

子ほな森

片影をゆく人疎らミラノに昼
炎帝の贄か聖人像宙に
尖塔の聖人二千夏の空
炎昼やドウオモの大理石とろり
スカラ座へ向ふ人波夏夕べ
羅や「椿姫」観に行くところ
Trinitalia 樹々奔放に大夏野
老若の肌露はやみな灼けて
伊太利に日傘さしゐて日本人
ボンジヨルノゑのころ草が線路脇

オリイヴの実に手の届きバルコニー
朝のビュフェ西瓜生ハムにも飽いて
空埋めてマグリットの雲葡萄畑
ゴンドラはヴェニスの水の水すまし
水都夏ボトルの水を大切に
求めたるヴェニスの扇白レース
朝涼やヴェローナの鐘鳴り渡り
ロミオ立ちし中庭狭し蔦茂る
ジュリエット立ちし窓辺の夜涼かな
アイーダ哭く野外劇場夏の月
爪伸びて旅の終りや夏深く

泣く

自分史に泣き笑ひして花見膳
泣き顔の君に届ける栗ごはん
長泣きの嬰の寝入りしや虫すだく
吸り泣き広ごりてゆく卒業式
泣ききつて力も抜けた秋の雲
泣き言を母に叱られ夕端居
川と化す山の夕立泣き出す子
乳呑児に大泣きささる桃の花
抱かれて泣きやむあかご春の雲
泣き笑ひ千鳥足あり酔芙蓉
杉の根やまき子がけふも泣きにくる
明け易し夢に小さな弟泣き
虫の夜やどこかの子供泣きつづけ
屋は蝶の越えし野川よ泣きに来る
泣きやまぬ児よ矢車は目にいたし
遠吠え村雪降り積めば泣き止まむ
泣き顔で笑ふをみなや年の酒
老いくらべ泣き顔を似て初笑ひ
ひさびさに児の泣き声やフリージア

鳴く

鳴くときは甲羅を脱げよ春の亀
軍政ながし緬甸の亀は鳴くといふ

芝宮須磨子
秋川 泉
須賀 敏子
斉藤 裕子
斉藤 裕子
斉藤 裕子
石森 理和
石森 理和
石森 理和
長崎 桂子
定梶 じょう
田中 藤穂
田中 藤穂
渡邊 友七
渡邊 友七
堀内 一郎
堀内 一郎
堀内 一郎
鈴木多枝子
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝

亀鳴くやたたいて点す豆電球
亀は鳴くと年けて歸りしちちとはは
亀鳴くを水面恍惚八十路かな
幻覚と云ふ副作用亀の鳴く
田螺鳴くころのどこかのぞかれて
地虫鳴く庭に小陰のしめりかな
河鹿鳴く闇の川原を澄明に
木の葉髪耳いたきまで鳥鳴く
鴨の鳴く声透る大寒気
鳴く千鳥沖に座礁の船あかり
ねずみ鳴く闇木枯にうづくまる
空のなき町住みなれしちちろ鳴く
青蛙どもり鳴く夜の膝冷ゆる
籠の中のよく鳴くインコ走り梅雨
遊びでは度が過ぐいくさ蚯蚓鳴く
蚯蚓鳴くこんな弱つてよいものか
こほろぎの鳴く場もなくしち里の家
去つてゆく火星小さしちちろ鳴く
携帯コンロ豆腐味噌肉夜鷹鳴く
旅三日書齋の隅に鳴くちちろ
蛙鳴く連鎖反応月のぼる
鹿鳴くや橡の実スパッと三つに裂け
鳩鳴くや冬たんぼぼの首短か

佐藤 恭子
佐藤 喜孝
河合 笑子
芝 尚子
後藤 志づ
河合 笑子
早崎 泰江
堀内 一郎
早崎 泰江
関口 ゆき
渡邊 友七
関口 ゆき
渡邊 友七
田中 藤穂
田中 藤穂
佐藤 恭子
佐藤 恭子
鈴木多枝子
田中 藤穂
石森 理和
森山のりこ
早崎 泰江
石森 理和
渡邊 友七

亀鳴くや年の功にはさからはず
泳ぎたきしつぼのなくて田螺鳴く
隠し田のみみず曲りに郭公鳴く
山荘の朝寝ゆるさず郭公鳴く
天神のぐるり浄めし蚯蚓鳴く
梟の鳴く夜は父の膝に居る
終戦の瓦礫の中にちちろ鳴く
母親に似てきたらしい田螺鳴く
虎造の清水次郎長田螺鳴く
また鳩が出て鳴く時計熱帯夜
地虫鳴くサービスタイムのラブホテル
祖父の家蚯蚓鳴くこと昔より
ブルドーザー終日動きに地虫鳴く
小夜更けし川越街道地虫鳴く
地蟲鳴く終着驛のひとつ前
浅蜩鳴く声を聞きつつ寝入りけり
この屋にも蟻蛄鳴く夕刊配りかな
新仮名やさういふわけで蚯蚓鳴く
仕事上手で無口な娘きやある鳴く
ちちろ鳴く繕ふよりも捨てちまう
亀鳴くやおほかた読めぬ碑の文字
鹿鳴くやみささぎ脇の宿にゐて
自然界日毎に変化蟬の鳴く
蚯蚓鳴く日光の宿寝付かれず
亀鳴くや数独の穴あとひとつ

堀内 一郎
定梶 じょう
渡邊 友七
渡邊 友七
田中 藤穂
田中 藤穂
東 亜未
田中 藤穂
渡邊 友七
須賀 敏子
須賀 敏子
佐藤 恭子
田中 藤穂
篠田 純子
定梶 じょう
長崎 桂子
赤座 典子
佐藤 喜孝
鎌倉喜久恵
定梶 じょう
定梶 じょう
藤野 寿子
須賀 敏子
須賀 敏子
竹内 弘子
井上 石動
長崎 桂子
斉藤 裕子
秋川 泉

啼く

屋根裏を飛び交ひ鳴くや親燕
落暉とどまるかなかなの鳴くかぎり
雉鳴くや目をこらしても広野原
鶯の上手に鳴くや山緑
木洩日に葉のうら光り雉子啼く
曇り空鳩の啼く声梅雨の声
日記帳繙くがごと郭公啼く
木苺や昼啼く鶏の睡り時
少年に命重しよ十一啼く
鶏の昼啼く島や蛇苺
朝蟬に浸る境内鹿も啼く
河鹿啼く宿の女将が床をとる
青葉木菟啼く度闇に白泛かぶ
夕立が来るかも知れぬ犬が啼く
ひとりゐてつくづくひとり狐啼く
地の底に啼くこほろぎや税重し
湧水の岩間石間に蛙啼く
凶書館が閉館の森臬啼く
あかあかとお台場は不夜啼く千鳥
高くながく犬啼く冬に首のべて
朝一番ミンミンが啼く直ぐ雨に

王 岩
定梶 じょう
秋川 泉
大日向幸江
渡邊 京子
早崎 泰江
早崎 泰江
後藤 志づ
後藤 志づ
須賀 敏子
後藤 志づ
山荘 慶子
石森 理和
定梶 じょう
鈴木多枝子
渡邊 友七
渡邊 友七
石森 理和
定梶 じょう
井上 石動
佐藤 恭子
石森 理和



佐藤喜孝

田中 藤穂

大いなる白雲流れ秋夜かな
風渡り光の波の薄原
無患子の背高のつぼ秋の翳
ゴム紐が蛇に見えたる萩の風
次の世は一芸欲しや猫じゃらし

風渡り光の波の薄原

薄の原が風に揺れる。その様を光の波とあらはした。薄原そのものを直裁に描いた。力のある作品である。

ススキを「薄」の字を当てるのは何故だらうと使いながらも調べてこなかった。ムクゲを「木槿」と書くやうに漢語からきてゐると知った。植物の名には思ひ浮かべ

るだけでも多々ある。「芒」の字も使はれる。和名の由来も諸説あるとのこと。

次の世は一芸欲しや猫じゃらし

「一芸」でさまざまなことを思ひ出した。句会後の酒席で元海軍少佐は決まって唱歌の「へ兎追ひし」を直立不動で歌ってゐた。高島茂のさんさしぐれも逸品。あああの人は声色が十八番だったなあ。わたしも指名がかかると素人の強み、江差追分や長持唄など酒の力を借りて歌ったことなど思ひ出した。そこへゆくと一郎さんは指名がかかるのを待つ方であった。ハモニカ・詩吟・民謡とその場に合はせて何でもござれ。藤穂さんもふとそんなことを思ひ出したのかもしれない。日常の眩きが季語ひとつで燻し銀の仕上がりになった。

赤座 典子

秋空に伸び縦長の信号機
赤ワイン進む特製焼林檎
秋の空絵葉書の乗るバルコニー
下船するクルーの笑顔秋うらら

同じ録画同じ会話の温め酒

同じ録画同じ会話の温め酒

お気に入りのテレビ録画を、複数、たとへば二人で鑑賞してゐて、ある場面にくるとどちらからともなく話しかける。前に見た時と同じ会話が始まる。きつと二人にとって印象的な場面なのであらう。季語「温め酒」は二人の間に幸せな時の流れてゐることの証し。

定梶じょう

狛犬も阿の獅子も十三夜かな
尾根出づる時の逡巡後の月
さびしさは零余子が落つる音もなく
ささめけりチークの卓の胡桃達
身に入みて喪服のひとに追ひ越さる

狛犬も阿の獅子も十三夜かな

無機質な石も犬や狐または神や仏の形にすると命を
持ったやうに思へてくる。口をつぐんだ狛犬も口を開い

た獅子も辺りの景色に溶け込んで十三夜の風情を深めてくれる。句またりも工夫のあるところで趣を添へてゐる。

身に入みて喪服のひとに追ひ越さる

道を歩いてゐる。と、人に追ひ越された。喪服の人に
である。足が遅くなつたとかいふことではない。その喪
服の後ろ姿にふと「身に入みて」という感慨が忽然とわ
いた。刹那の言葉に表しがたい寂しさを、季語を利用して
言ひ止めてゐる。

篠田純子

曲らねばならぬ角なり金木屋
銀座湯に倶利伽羅紋紋秋の宵
遮断機のたわたわ伸びる秋の雨

曲らねばならぬ角なり金木屋

これから行くところは進んで行きたくないのだが、
もう「曲らねばならぬ角」まで来てしまった、と続く。

うれしいこととは反対の、意を決して曲がる道の角である。金木犀が印象的。

大日向幸江

クリスマス市ドイツの星の逞しさ
裏道抜けて始まる年の市
春を待つ枯木に艶の見え隠れ
思いつきり十年日記買ふことに
年始よふ畑の野菜買いに行き

春を待つ枯木に艶の見え隠れ

季語の「枯木」は枯死した樹木ではない。春を待つ冬の木である。この死んだやうな樹木の裡に「艶」が見え隠れしてゐるのを作者は見つめた。春を待つ樹木のいのちを見た。

秋川 泉

大空に吸ひ込まれゆく渡り鳥
紅葉狩り山の出で湯に猿も居て

十月のトマト鈴生り誰が植えし
秋の蚊を追ひ払ひつつ句集読む
煙り出ず秋刀魚の香ばやけけり

煙り出ず秋刀魚の香ばやけけり

都会では秋刀魚を焼くにも工夫があるだいたい前秋刀魚を炭火で焼いてみたが玄関先の路上に出て焼き始めた。煙が出て悦に入つてゐると、近所の人が飛び出して来た。昨今は煙の出ない魚焼き器が売られてゐる。泉さんも秋刀魚は煙が出ないと落ちつかないやうだ。

長崎 桂子

新蕎麦や薬味不要と戴ける
鉢鉢に借景入れる菊日和
櫻紅葉朽ちたり擡げくるもの
法灯もLED電球冬来たる
夜半より虎落笛来る支度急く

法灯もLED電球冬来たる

「女車掌の秋の声」はよつて季語の「秋の声」とは違ふ。○○○女車掌に気の和む」では。

井上 石動

新高輪プリンスホテル菊日和
下っ端の新劇女優リングゴむく
もみぢ葉の山脈やかに淋しさう
岩殿は形変へる山冬入日
籠国や小春日和の薬師堂

下っ端の新劇女優リングゴむく

こういふ世界に暗いのでよく分からないが、楽屋裏か稽古場での寸景であらうか。表舞台の華やかな女優を目指す人にも下積み時代がある。さういふ人に焦点をあてた。赤から白色に変はるリングゴが鮮やかに見えてくる。
(順不同)

時の流れには抗しがたい。抗しがたしとおもひながらも、時のうつろひに淋しさを感じるのは如何ともしがたい。最後の砦とも云へる神社仏閣もその例に漏れない。桂子さんにとつてまさに「冬来る」である。

七郎衛門吉保

冬支度友の詠みたる行李かな
冬隣探す肌着のヒートテック
四十四度湯船ぬくめし冬隣
秋の声耳鳴りのごとみな遠く
気が和む女車掌の秋の声

秋の声耳鳴りのごとみな遠く

「秋の声」は難しい季語である。辞書には「秋の気配。風の音水の音鳥の鳴き声などから受ける物寂しい秋の感じ」とある。秋の声が耳鳴りのやうとは読まない。「耳鳴りのごとみな遠く」は回頭の思ひである。耳鳴りは現実であつてもなくともよい。左様な時、「秋の声」が聞こえて来たのである。

佐藤喜孝 著

青宮貝

を読む
七

佐藤 恭子



テレビアンテナはタンガレドリ目ヘスペルオルニスの骨

ヘスペルオルニスは白亜紀後期に棲息した体長1から2メートルの海陸両生の飛べないペンギンのような水鳥である。

鋭い爪と水掻きを持っている。図鑑で見ると後肢が発達した獐猛そうな鳥である。その鳥の骨が今やない家はないと思われるテレビのアンテナというのだ。言われてみれば屋根の上に無愛想に立っているテレビアンテナは、鳥が羽をひろげて飛んでいる形を骨だけにしたもののようだ。何百年後？かに化石となってタンガレドリ目ヘスペルオルニスの骨と発表されるかも知れない。面白い発想又楽しい発見である。

因みに私の住んでいる中野坂上周辺はテレビアンテナ

が立っていない。新宿のビル群のお陰というかビルの影になり電波障害となり有線になっている。後世、この地区は骨の化石が出ないので不思議がられるかも知れない。

これからはデジタルの時代、円いパラボラアンテナが増えた。

火に洗ふあらひのこりし萇草

春ともなると、あちらこちらの田の畦、小流れの土手など小さな芽が出てたちまちそこら中を今までの枯色から青々と色を変えてしまう。落ちついた枯色もいもの

だが、春の色は活気が出てもう少し頑張ろうかなという気がどこからともなく湧いてくるのは私だけであろうか。

そんな外へ出てみたくなった日に摘んできた芹・薺等を茹でで食卓にのせる。

茹でる状態を火に洗うと言いきった。

火に洗うと茹でることにつかっただのは初めて読んだ。私が、俳誌の紹介のホームページを作っているが、その時、諸先輩の俳句を読ませてもらっている。ホームページを作る為に月五千句以上の俳句を読んでいることになるが、茹でるを火に洗うと言ったのはまだ目にしてない。摘草のなかに小さな萇草がまじっていた。一緒に茹でなくて良かったという気持ちだが、洗いのこせしではなく、洗いのこりしという言葉で表した。余韻があつて良かったと思つた。

それにしても、火に洗うという言葉は強い力がある。萇草の小ささをひきたてている。

貝塚のアサリのほかは名を知らず

私達が普段貝の名前や形をよく知り得る機会は、店の

店先で売られている蛸・浅蛸・蛤等である。又お鮎やさみで見られる機会があるとすれば赤貝・水松貝ぐらいのものだろうか。寿司屋さんで見ると貝類は貝殻は付いて来ないので、私などは赤貝ぐらいのものである。浅蛸と蛸は普通の食卓にのぼるので見れば分かる。

楽しみに貝塚に行つて自分の知っている貝が貝塚から見いだせたとしたらどんなにか楽しいだろう。そんな心持ちで胸を膨らませて出かけていった。ところがよく分からない。自分では知っているつもりで居たのだが皆目知っている貝に突き当たらない。いくら目を見開いてもアサリだけは分かったのだが、ほかは駄目であった。自分の知らないものが世の中には沢山あるものだと思ひ知らされた。貝一つとってもこれであるから言わずもがなというところである。知っているようで知らないことだらけである。生きている間にどのくらいのものが頭の中に刻み込まれるのであろうか。それは人によつて違ふのは当然だが、一生って長いようで短いものである。それにしても後どのくらいのもを体験し経験できるのであろうか。人生のほとんどを使い切ってしまった今そんなことをふと思つている。

あとがき



明けましておめでとございます。

年頭の抱負は「あを」の平常刊行です。

それにつけても厳寒といふにふさはしい寒さです。わが家の台所は暖房なしなので、そのせいかもしれません。北国ではさうゆう話を聞いたことがあります。冷凍食品を解凍せんとして朝出しても夕方まで自然解凍しません。この寒さで蒲団の暖かさがしみじみ嬉しく感じます。寝る時妻が口癖にしてゐた言

葉に前半は忘れましたが、「うき世の馬鹿は起きて働け」と呟いてゐました。祖母の口癖たさうです。わたしも早くに蒲団に潜り込む時は後ろめたさでこの言葉を呟きます。

生まれて初めてどんど焼きを見に行きました。杉並の小学校で40年前から続いてゐるとのこと。孫に電話で誘はれいそいと出かけました。お餅入りのお汁粉を頂き温まって帰ってきました。

(喜孝)

二〇一八年一月号

発行日 一月二五日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)